

New Products

高齢者と高リスク者への肺炎球菌ワクチン

新規の3剤は効力も安全も評価なし、死亡が増える

薬のチェック編集委員会

まとめ

- 2023年4月から相次いで3種類の肺炎球菌ワクチンが販売開始になりました。2剤は小児と高齢者用、1剤は高齢者用です。これら3剤を加えると、肺炎球菌ワクチンは現在合計4種類あります。
- 接種の目的は、乳幼児や高齢者など高リスク者の「死亡に至る肺炎球菌感染症の減少」です。ところがどのワクチンも、その効力と安全性を証明するランダム化比較試験（RCT）なして承認されてきました。新規3剤は承認後も実施されていませんが、承認後に実施されている従来の製剤のRCTを検討することで新規製剤の効力を推測します。
- 本剤の目的から、より高リスクの人の肺炎死亡と総死亡に注目して、これらRCTを検討しました。その結果、肺炎球菌ワクチンは、肺炎による死亡を減らさず、肺炎以外の死亡を増やし、37～40人に1人が何らかの病気で余計に死亡することになると推定できました。
- 健康者接種バイアス（註1）を考慮した観察研究のデータからも、肺炎球菌ワクチンは肺炎による入院や死亡を増やし、RCT同様、特に虚弱者で危険度が高いと推定できました。

結論：新製品を含め肺炎球菌ワクチンは全て、利益は皆無、害だけ。接種しない。

キーワード：結合型、非結合型、血清型、肺炎死亡、総死亡、健康者接種バイアス、定期接種、侵襲性肺炎球菌感染症